

釧路湖陵高等学校における実践内容 (本フィールドでの活動のみ抜粋)

《概要》

[日程] 2016年8月3日(火)、8月4日(水)

[参加者] 理数科1学年41名(約20名ずつに別れ、両日、同様のプログラムを実施)

[講師] 新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター技術委員長)

[解説] 寺内 聡(環境省釧路湿原自然保護官事務所)

山本 泰志(公益財団法人北海道環境財団)

[単元] SSH科目「KCS基礎」

[釧路湿原巡検の目的] 環境科学における科学的な探究手法や現在の課題について現地
の状況等を見学することにより、北海道東部の自然環境について効果的な探究課題を
設定する方法を学ぶ。

[プログラムのねらい] 原生的な湿原環境が保全されている赤沼でのフィールドワーク
を通して、関心喚起を図るとともに湿原が有する価値を体感する。また、湿原への河川
流入部、土砂流入対策事業地の訪問を通して、湿原に生じている課題を知り、人と自然
との共存のあり方をみつめる。

[実施プログラムの概要]

9:00 温根内ビジターセンター着、赤沼周辺でのフィールドワーク

11:50 下幌呂コミュニティーセンターにて昼食

釧路湿原流域および久著呂川についてレクチャー

13:10 久著呂川湿原流入部土砂流入対策事業地着、フィールドワーク

14:50 中久著呂コミュニティーセンターにてトイレ休憩

15:15 久著呂川中流部侵食対策事業地(中久著呂)着、フィールドワーク

16:00 釧路市内へ出発

○大規模侵食箇所

川の景観の変遷等について昔の写真や眼前の風景を見ながらレクチャーを行った。かつては蛇行河川で、増水した時には氾濫し土砂を補足していた場所。治水のために直線化したのが、平成に入った頃より侵食が進みはじめ、20年程で元の川底から5m程掘れてしまった。侵食の理由は、直線化や土砂採取など、いくつかの要因が絡んでのこととされている。ここの基底岩は火山灰が固まったもので、もろい。表面に堆積していた砂利が流さ



れてからは一気に侵食が進んだと言われている。河畔林が河岸の上部に見えるが、そこが直線化した際の水面のライン。また、河岸の崖状になった場所に時折角のとれた砂利が並んで埋まっているのが見えるが、それは、直線化前の蛇行河川時に川底と考えられる。この砂利のある場所、堆積の向き、河畔林の様子などから、かつての河道を思い描くことができる。

○中流部河道の安定化対策事業地

事業地で行おうとしていることについてレクチャーを行った。ここは川幅を拡張し、蛇行の外側に護岸を入れるとともに、川底を固定するために部分的に帯状の構造物を入れたり、石を積めたものを置いたりしている。侵食は国道にかかる橋の下流から 2.5km 下流側に続いており、全てをコンクリートで覆いつくすのではなく、最低限の工事を行い、モニタリングとあって、河川の変化の様子を見ながら、自然の土砂が堆積していくことを



期待している。左岸については、現在も使われている採草地があるため、護岸をしっかり入れている。中州のような場所が見えるが、多年草や樹木が入っていないことから、土砂が溜まったり流されたりして動いている場所だと考えられる。川幅を広げたことで砂が堆積した。次第に上流部から流れてくる砂利も堆積するようになり、石をめくると水生昆虫も見られる。こうした砂利があることで虫が住め、それを餌にする魚も住むことができる。

現在見られる景観は、人間の影響を受けてこのようになった。一方で、ここで生活し、酪農を営む人にとっては、河川を直線化し採草地を作ること、氾濫を防ぐことは必要なことだった。当時、このような変化が起こるとは誰も想像できなかった。誰か悪者がいるわけではない。地域の人々の生活や営みとともに、自然を守ること、次の世代に受け継いでいくことの両方を私たちは考えていかななくてははいけない。